

## 〈研究ノート〉

## 火野葦平と北朝鮮 (1)\*

——「北鮮旅日記」翻刻と小説「板門店」「北鮮女性点描」——

李 建 志\*\*

## はじめに

火野葦平の研究は、主に戦中期の小説『麦と兵隊』や『花と兵隊』などの小説群に対するものと、彼が旧日本軍に従軍してフィリピンやインパール戦線<sup>1)</sup>、中国戦線を描いたという側面を研究するものが主となっている。しかし、増田周子氏が注目した昭和30(1955)年の小説集『赤い国の旅人』に対する諸研究<sup>2)</sup>を除くと、敗戦後の火野に注目する研究者は少ない。火野は昭和12(1937)年に小説『糞尿譚』でデビューし、昭和35(1960)年に自殺しているから、彼の作家人生はむしろ敗戦後の方が長いにもかかわらず、である。

敗戦後、戦中の従軍作家としての「活躍」が問題視され、火野は公職追放の憂き目にあっている。しかし、作家としては戦後も絶え間なく小説を発表し続けており、昭和32(1957)年には「糞尿譚」が「伴淳・森繁の糞尿譚」(野村芳太郎監督、橋本忍脚本。内容は大幅に脚色されている)として映画化されるなど、決して忘れ去られた作家ではなかった。また、戦中に日本軍の従軍

作家として活躍したことを払拭せんとしたのか、敗戦後の昭和28(1953)年に欧州旅行に出たり(のちにこのときの体験を元に昭和31[1956]年に北辰堂から『小説欧羅巴』を上梓)、アジア諸国会議(インドのデリーで開かれた社会主義国の文化人を主に招待した会議)に参加し、中国、北朝鮮にも足を伸ばしたときの体験をルポルタージュ風小説集『赤い国の旅人』(朝日新聞社、昭和30[1955]年)に記したり、昭和32(1957)年にアメリカに旅行し、それを元にして昭和34(1959)年に『アメリカ探検記』(雪華社)を発表するなど、それこそ世界中を飛びまわっていた。しかし、先に挙げた増田氏の研究を除くと、これらの敗戦後の火野葦平についてはほとんど顧みられることはない。いや、それどころか火野の従軍ノート、手帳の類いも、先に挙げたもの以外ほとんど翻刻されてさえない。その意味では、火野葦平研究はまだその全体像を描く段階に達していないといえよう。

このような状況を受けて、私は増田氏の研究の補完として、また自分の研究との関連性から、火野葦平「北鮮旅日記」<sup>3)</sup>をひもとき、翻刻するとともに、ルポルタージュ風小説「板門店」と「北

\*キーワード：火野葦平、北朝鮮、日記、1955年の北朝鮮文化事情

\*\*関西学院大学社会学部教授

- 1) 火野葦平のインパール戦線従軍記は、増田周子氏と渡辺孝氏が翻刻、解説した『インパール作戦従軍記：葦平「従軍手帖」全文翻刻』(集英社、2017年)がある。
- 2) 敗戦後の火野葦平について集中的に書かれた研究としては、増田周子氏の著書である『1955年「アジア諸国会議」とその周辺：火野葦平インド紀行』(関西大学出版部、2014年)のほか、単著論文「一九五五年火野葦平の北京視察：その認識と見解」(『関西大学文学論集』第71巻3号、2021年)、「火野葦平の新中国視察記－広東から、漢口へ」(『関西大学東西学術研究所紀要』第49号、2016年)、「一九五五年 火野葦平「アジア諸国会議」参加後：インドから香港、広東へ」(『関西大学文学論集』第65巻2号、2015年)、「火野葦平「中国旅日記」(1955年4月)翻刻」(『東アジア文化交渉研究』第3号、2010年)などがある。
- 3) 北九州市立文学館の資料としては、手帳「新中国(Ⅲ)北朝鮮旅日記」と分類されている。しかし、火野は手帳の最初に「北朝鮮」ではなく、明確に「新中国(Ⅲ)北朝鮮旅日記」と書いていることをここに明らかにするとともに、本論では「北鮮日記」として取り扱う。

鮮女性点描」について言及していきたいと考えている。この「日記」は北九州市立文学館が保存しているものであり、火野葦平関係文献を担当している稲田氏の協力のもとで翻刻できたことをここに明記する。また、この研究は私の科学研究費研究課題「大日本帝国と李垠－朝鮮最後の王から見た日韓の比較文化研究」（基盤研究 C 課題番号 19K00538）の一部であることもあわせて明記したい。

## 1 「北鮮日記」翻刻

火野はアジア諸国会議参加後、中国を旅し、そのまま鉄路で北朝鮮の首都・平壤へと入った。昭和 30 年 5 月 17 日のことである。そして、5 月 27 日にやはり鉄路で中国の北京へと向かうのだが、その間に南北朝鮮の境界にあたる板門店を訪れたり、崔承喜の公演を見るなど、北朝鮮の多くの場所を見学している。崔承喜の公演は、敗戦前に日本陸軍幹部だった朝鮮最後の王・李垠も東京で鑑賞している。この時期に彼がどこを訪れ、何を見、何を考えたのか。「北鮮日記」はそれを解く鍵を握っており、またその体験を元にした小説「板門店」と「北鮮女性点描」は、「日記」との対比があってはじめてその意味がわかるものだと、私は理解している。ゆえに、以下に「北鮮日記」を翻刻する。ただし、この北朝鮮旅行は、アジア諸国会議とは別と考えられていたため、新しく旅行団が組み替えられ、団長も変更し、参加したのもインドと中国を訪問した者全員ではないという特徴がある（火野、1955、頁）。また「北鮮旅日記」は同年 5 月 16 日（中国瀋陽）から書き起こされ、上海、香港を経由して日本に帰るまで（

月 9 日）の日記が記されているが、出発前日から北朝鮮にかかわる部分のみを翻刻する<sup>4)</sup>。ただし、ほんの 10 日前後の旅行での記録であるにも関わらず、その分量は膨大であり、とても一回の翻刻ですべてを紹介することは出来ない。よって今回は「北鮮日記」（1）として、5 月 16 日から 5 月 20 日までの 5 日間をまず翻刻したい<sup>5)</sup>。

欄外上部 5 月 16 日－6 月 8 日（瀋陽－平壤－北京－上海－広州－香港）→東京

5 月 16 日（瀋陽）

○朝食十人になつてしまつてさびしい。しかし、これからは前のやうに全体会議で悩まされることはないかも知れない。すこし腹工合がわるいのであまり食べないことにする。今日は自由行動、はじめて暇ができた。吉岡さんだけ、農学院に行き、あとは街に出て行つた様子。雨が降つてゐたが、ひるころには晴れて来た。相原君へあてて、西日本〔新聞か〕原稿かく。「新中国になくなつたもの」14 枚、三回分。出発のとき、十五回位と約束したのだが、これでやつと七回分、それよりも省察中、どこをどうしてゐるか、気がかりで仕方がない。しかし、これはいくら考へても仕方がないこととあきらめる。ヘルシンキ行を九州平和連絡協議会でそしきせんと決定し、東京でも数〔?〕名のうちに正式に入れたとのこと。4 月 23 日の「アカハタ」に出てゐると〔三代目中村〕翫右エ門さんが話してゐた。終戦直後「アカハタ」に文化戦犯第 2 号とかかれたことがある。苦笑。ヘルシンキに行く者は中国側でもモスクワを通つて行けるやう、アッセンするといふ話、行きたいのは山々だが、今度は断念した。ヘルシンキ平和

4) 当該日記は、註 3 にもあるように、中国での「旅日記」の第 3 冊目という意味もある。手帳に「新中国（Ⅲ）」とあるのは、北朝鮮から鉄路北京入りしたあとの日記もあわせて書かれていることに起因する。また、翻刻部分で明らかなように、実際には 6 月 9 日の記載もあるが、火野の手帳の頭には 6 月 8 日までと記載されている。

翻刻にあたり、かなづかいはいは原文を生かし、漢字に関してはできる限り新漢字に改める。また、数字は原文が算数字の場合は算数字に、漢数字の場合は漢数字とした。さらに、漢字の間違いや意味の通りにくいところは〔 〕で私が注釈を入れ、どうしても読めない箇所は□で記した。

5) インドで開かれたアジア諸国会議に参加したのは、団長の松本治一郎、副団長の谷口三郎のほか 34 名に、オブザーヴァー名を加えた 36 名だった。そのうち、北朝鮮に入国したのは、火野のほか、朝田善之助、牧之内武人、安部きみ子、鈴木朝英、来馬琢道、泊谷裕夫、吉岡金市、中村義麿、松岡武一郎など 10 名。正式メンバーではないが、準備委員会に名前を連ねる畑中政春もアジア諸国会議に参加したのち、中国と北朝鮮を旅行しており、彼をあわせて 11 名がこのときの訪朝団となる。

愛好者大会〔ヘルシンキ世界平和集会〕<sup>6)</sup>は一ヶ月のび6月27日から一週間、かへりは七月中ごろになるし、大変になる。金もないし、ソビエト行くつれもない。一人ではいろいろな意味で困る。残念無念。中原君にその旨伝へ、日本へ連絡してもらふことにした。またの機〔会〕。

○航空便、ホテルの郵便処に出すと、1円31銭！

○午後二時、揃って朝鮮領事館に行く。鄭重な挨拶。ゆつくりとして行ってもらひたいとて、ビール弁当酒など接待。先方ではこれまでこんな一隊が北鮮をおとづれたことはないらしく、熱心で、なにか、非常な期待を持つてゐるやうである。あまり期待されても困るが、経済内通、文化交流、日本人引揚げ問題、具体的な話しあひがあるらしい。いろいろ質問があるので、板何ゼット機基地、李承晩ライン、若松〔平壤郊外の地名〕南北闘争の件のことなど話す。辞去して三和〔三輪〕の車で域内へ行く。途中、吉岡牧之内氏降りる。○一九〔時か〕、三輪車を捨てて〔放って〕小集関小什術へ行く。

5月17日（瀋陽－平壤）

○何度も眼がさめ、何度もとぎれとぎれの変な夢見る。女房がどこかに出て来た。三時半、下に降りる。みんな集まつたのに安部女史来ない。坂本さん、エレベーターで迎へに行く。まだ寝てゐた由、時計まちがつてゐたといふ。畑中さん、病院からかへつて来る。元気の様子。自動車ホテルを出発。もう明るい。駅は近いので、すぐ着き、フオームに出る。呉君はここから北京へかへるのでお別れ。じつによく努めてくれた。好青年である。握手すると「また逢はせて下さい」といふ。さういへば、北京でもう一度逢〔え〕るはず。瀋陽平和委〔員会〕の〔空白〕さんもわざわざ送つて来てくれた。謝意を表して乗車。ベル鳴る。4時7分発車。前に乗つて来た箱だが、駅は牧之内、朝田両さんと同車。眠いのでまた寝る。○朝鮮連絡処からも二人送りに来てゐて、一人の通訳の人が国境までいつしょに行くとのこと。平

和委からも一人ついて来る。ていねいなことである。朝鮮に行くといふことについての複雑な感慨。

○七時半食事。牧之内、朝田両さん、瀋陽で辰〔虎か〕の皮を買つた〔と〕話してゐる。前者250円、後者290円、あまり人にいふなよなどといふ。吉岡さん入つて来て、窓の外を見て農業の話。青色の中国服、牧之内さんはうす褐色の中国服。

○安東着10時。大勢の人たち出迎へ。朝鮮側からも来ている。待合室に入る。消毒液のにほひ。少しの時間があるので、市内を案内して貰ふ。タクシー三台。毛沢東路に立派な文化宮が新築、五経路に廻つて駅へ。遠くに昔の神社の鳥居だけに見える。人口三〇万だが、周囲の工場の方に人が多いらしい。駅の出口には三つ改札口があるが、その二つは軍人、あと一つが普通、軍隊の出入が多いのであらう。

○安東駅、11時40分発車。ゆるい速力。

○鴨緑江をわたる。二千米の鉄橋。古手の一本はむざんに破壊されたまま、いまわたつてゐるのも何度もやられたのを修復したといふ。鉄道の横に、車道人道がついてゐる。ひろびろとした流れは上流の方から二つに合してゐて、浮かんでゐる船点々。うすくにごつた水の流れ。すぐに朝鮮側に着く。橋畔のこわれたトーチカ。安東側のは壊れてゐなかつた。

○新義州 対岸とはがらりと変つた風景。橋畔の土堤に咲く黄色い花。さんたんたる廃墟。砲火の名ごりはいたるところに残つてゐる。

○駅に着くと、フオームに大勢の出迎へ。花を持つてゐる娘たち。リラの花をうける。駅の待合室に行く。この駅もやつと去年できたといふ新しいもの。便所をきくと、まだできてゐないとて、五六人、駅の外にある素末〔粗末〕な共同便所につれて行かれる。見わたすかぎりの焼野原がそのまま、わづかに残つたレンガ造りはガランドウ、その中に初級中学の建物だけが新しい校舎をそびえさせてゐる。たくさんゐる朝鮮人たち。みすばらしく、表情も明るいとはいへなかつた。駅の壁に

6) 1955年6月に開かれた核兵器全廃を含む軍縮を求める会議。広島に原爆が落とされた8月6日を「世界平和行動の日」と定めたヘルシンキ・アピールを採択した。この会議には、J. P. サルトルが出席し講演した。

もたれてゐる一人の若い女、腹の前に赤ん坊を入れてゐるが、太陽が眠つてゐる頭に直射してゐるのもかまはず、ぼんやりと立つてゐる。

○いろいろな字がかいてあるが全部朝鮮文字なのでわからない。いちばん近かつ朝鮮がいろいろな意味で一番遠くなつてしまった。

○待合室にかへり、挨拶。

○新義州人民委員会副主席 田吉弘さんの話—アメリカ爆撃しばかつた〔はげしかった〕が、1950年11月8日、B29、戦闘機その他150台、無差別爆撃、全滅の状態になつた。前に住民は疎開したため人的被害は少なかつた。この以後も焼夷つづく。停戦協定まで毎日、必要な機関はどんなひどい爆撃のときにも残つてゐた。(怒りで涙ぐんでゐる)工場製造所、学校など地下にもぐつて仕事を継続した。復興は1953年7月28日以後の建設。その日、停戦協定、その日疎開先からすこ〔ぐ〕かへつた。労働党第一次全員会議で、人民復興の討議をおこなひ、この決定にもとづひて、工場その他建設がはじまつた。所属4人以上の作業員を持つ工場10以上、大学1、高級中学、専門学校3、ここの駅舎も去年完成、中央学院、劇場、道人民会館をはじめ、托児〔託児〕所2、幼稚園2が建設された。市内の緑化事業は市民の手でおこなはれ、去年だけでも28000本植えられた。来年度の決定は議会庁舎、広場、専門学校4、住宅(去年700、今年1400)人口8万。行政区が改制され、昔よりは狭くなつた。

○議場も11月8日の爆撃でやられた。2mおきに一発づつ位、焼夷弾十一万発(アメリカの方の発表)焼夷時間約40分、二本とも落とされたが、一本だけ復旧した。爆撃は朝1時から、波状爆撃、市内はガソリン巻〔撒〕いた。午後5時まで火の海だつた。のこつた家はレンガの壁だけ。

欄外上部「火縄銃の話」(林善玉氏)

○道立芸術劇場副総長林善玉さん(演出担当、日本語で話す)11月8日、10時ごろ、飛行場附近に爆撃に來たのを高射砲で追つぱらつた。ヤレヤレと思ひ朝食を食べようとしてゐると、大空襲がやつて來た。方々燃えだしたので、劇場のことが心配になり、500mほど離れた自宅から走つ

た。ソ連から來た映画機械を備へつけたばかり、15本のフィルムがあつたので、いつたん入つた防空壕から出て、みんなと協力して、二階にあがつてこれを外し、壕に入れた。劇場がうしろの方から燃えだしたので、消防署にとんで行くと、署も焼けてゐるし、ポンプは油工場や製絲工場の方に行つてゐない。文学聯盟党委員会に三つの芸術団体があつた。映画館四つ、火の中をとびまはつてゐて、文学団体の同志に出あふと抱ひ〔き〕あつて、何度も泣いた。直後、三つの団体を小編成の戦時文学芸術隊とし、五里位の山奥に入つて、移動活み〔営み〕をした。詩人鄭曙村がシユプレヒコール「われらは闘ふ」をつくり方々でやつた。一年位でもとの形にかへつた。安東の街はさんたんたる有様、母や赤ん坊の屍骸、半死の人々、戦争のおそろしさ、アメリカ帝国主義者への憤り。

○2時40分発といふことで、フオームに出る。時計を一時間進める。この時間は日本と同じらしい。時差が出入してさつぱりわからなかつたが、日本時間になつたことで、いかに日本が近いかを知る。フオームに出ると、ソビエートの車の前でロシヤ人がにこにこして〔三行消去〕ゐる。

欄外下部 ソビエート車(モスクワ行国際列車)  
220ドル、平壤から9日

次頁欄外下部 爆弾死、「魚波」駅、蛙の声

5月18日(平壤)

○朝食。味噌汁が出る。久しぶりに家にかへつたやうな気持。豆腐にシンギク〔春菊〕か入つてゐる。ノリ、大根オロシ。先方は客に対してすこぶる氣を使つてゐることがわかる。今日は午前中はなにもなく、午後から市内見学とのこと。十時半にスケジュールを打ち合はせのため、李さんが來るといふことなので、それまでにこちら側の打ち合はせをしておくことにする。団長室にみんな行く。

○畑中さんの話—(前に來た書翰など示して)

○二月八日、日朝協会と民戦の代表者と会つとき〔会つたとき〕、北鮮から貿易尻についての話があつた。石川県農工会議所へ、キカイ、残物を貰ひたい、鳥取県の漁業家が北鮮で漁業やりたいとい

ふと、一緒にやりたい、技術学びたいと返事。在日朝鮮人問題、北鮮へかへつて研修したひ、これをうけ入れて欲しい。技術者の中で北鮮へかへりたい者をうけいられるか。文化交流－崔承崙[喜]をよびたい。在日朝鮮人へ「人民中国」のやうな日本版を作つてもらへないかといふ委員。フィルムをよこしてもらひたい。

欄外上部（李さん－金日成総合大学法学部教授）

－インドで、李溪鳳鳳溪さんに伝へたところ、本会議で通告するからといふと。きくと、朝鮮側で決定してゐる、来馬さんに伝へてもいいが、日本代表を朝鮮へよびたいので、そのときにしたい。中村、松岡両氏が朝鮮大使館に行つたとき、在朝日本人をかへす話が出た。それか国内の新聞に出たところ、日赤があわてて、ジュネブの国際赤十字を通じ、朝鮮へ通じてくれと電報打つた。日朝協会から手紙が来た。1、在朝日本人の帰国問題につひて。国内で関心が高いので、解決方窺ひたい。2、日朝貿易について。漁業組合で北鮮の両海岸で漁業をしたい。3、文化交流、崔承崙をよびたい。文化交流の窓口をつくつてもらひたい。4、在日朝鮮人の帰国を援助すること。（4月23日発の手紙）

○4月28日付、来馬さんから来た手紙－畑中正春を団長として編成し、一切の立場の権限を附與する。別に朝鮮側にも出してゐるらしい。李さんもうけとつたといつてゐた。そして、諸問題について案があるといふ。

○平壤人民政府副主席、赤十字社、別社長、人民銀行総裁、并〔並びに〕職業同盟委員長、国際貿易促進委員会委員長、などが駅に出迎へてゐた。平壤市民大歓迎。

○坂本さんの話－名称「アジア諸国会議日本代表朝鮮訪問団」であつて日朝親善使節団ではない。

○畑中さん－日朝協会、1949年春できた。

最初は日朝友好協会、会町来馬卓造、副会長李永表（僧侶、東鮮寺）、50年朝鮮戦争勃発、51年火焔ビル事件おこり、困難になつたので、親善といふ字をとつた。休戦後、弾圧が弱まり、活動が可能になつた。朝鮮使節団が十数名えられたか、旅券がとれなかつた。大山、亀田、黒田の三

人を代表に行つてもらつた。南も北もない統一朝鮮といふ目標。

欄外上部 田東赫 詩人（金日成総合大学、文学部教授）

○招待は、「朝鮮平和推薦会全国民旅委員」から。金日成將軍でなく、金日成元帥。

○松岡さん－中村さんの知りあひの鮮人で、母が朝鮮にゐる者から手紙をあづかつて来たので、送つた。田さんと李さんと中村さんが在朝日本人の帰国問題を契機、ソ連船で。李承晩ラインへの日本人の反感、北鮮系のデモ行為を注意。田「在日鮮人は日本法律を守るべきだ、しかし、政府は鮮人の行動の自由を認むべきだ」松岡「貿易機関を設置すべきだ。北京を通じて」田「朝鮮には日本代表部をおくとは別に日本にも朝鮮代表部をおけば結構」「しかし、それは今の状態ではむづかしい。」「しかし、日本貿易促進会でそれを運動して欲しい。その間通商使節団を組織して、北京か、朝鮮かへ派遣して欲しい」中村「帰還問題は通商問題と関連する」田「さういへば、これまで切りはなしてゐたか再考する」

その他、船の問題。田「送還問題は朝鮮赤十字で準備中」中村「船は日本から廻す」田「かへりたくない者は自由意志」。

そのとき、田さんが貿易について具体的にした。朝鮮搬入したい物－漁船、網、漁具、綿糸、裁縫機、電力用ケーブル、各種電力資材、発動機、変圧機、農機具、印刷機、マニラロープ、アイロンテックス、ケイモウ機、等 今は13ヶ国と通商してゐるが、日本とできればその枠をへらして貿易してよい。

輸出可能な物－マグネサイト、黒鉛、火薬石灰、塩、海産物（メンタイの子）、ウニ、人參、栗、アセチリン、カーボンブラック、珪酸、リン酸、人參酒、黄土、ケイ藻土、シイタケ、漢方薬、乾メンタイ、等。朝鮮は契約を結ぶ方法がある。決済方法はバーター制より仕方なからう。直接取引の希望。北京を通ると高くなる。田さん、文化交流の話したいといつたか別れた。

○安部さん－山口県でも貿易希望者が多い。夏ミカン、竹などが朝鮮へ行つてゐた。

○ドアをノック。李さんなど約束の10時半に来る。新しく世話係をつけてくれる。自分たちの部屋付として一人の青年。各部屋ごと。いっしょに317号室にかへる。先生の名前は作品で知っていましたといふ。この言葉ほど胸にこたへるものはない。

○康峯吉さん（作家同盟評論文科委員会）30才、咸興中学を出た。そのころ日本語を習った。大学時代戦争、学生軍となつたが、敵を圧したとき、学校へかへれという命令、停戦まで勉強した。わからない字の新聞を説明してくれる。

○新聞—「労働新聞」労働党中央委員会機関紙「祖国戦線」祖国統一戦線中央委員会キカン誌、「民主朝鮮」政府キカン紙、他ハ「労働者新聞」職場組同盟中央委員会機関誌、「教員新聞」教員組合「農民新聞」農民同盟中央委員会「民主青年」民主青年同盟、「建設者」国家建設委員会機関誌。雑誌もたくさんある。

○新聞—（一面）朝鮮と関係ある国際情勢、建設面（二面）批判的なもの、社会的なもの、個人的なもの、封建的残滓がまだあるので、それを批判、「土地を自慢せず植苗を誇れ」読者からの声、投書、応答、青年運動民生事業に対す党の述、（3面）文化、生活、建設面の復興状態、平壤復興計画5月1日で第一段階終り、8・15（解放十年記念日）第二段階で一応終る。将来統一されたとき、京城がやはり首都となる構想がある。南鮮における闘争の記事。アメリカ映画に対する闘争を支持する（4面）外国ニュース。等。

○これまでほとんど連絡がなく日本でも、北鮮でもおたがひに状況を知らずにゐる。殊に、文学作品など、若干のホンヤクがあつても自分は読んでゐる者がない。金史良の芥川賞候補作品は読んだが、彼は南方戦場で行方不明になつてゐるとのこと。康君に朝鮮文壇の状況をきく。

○朝鮮作家同盟—正式盟員、候補盟員。解放作家（正式盟員）中央委員会各分科委員会に労働委員が入つて連絡、小説、評論、戯曲、詩、児童の分科。作曲家同盟、美術家同盟、等か別にある。李箕永—1925年、カツプ（朝鮮プロレタリア作家

同盟）時代からの中堅、1932年「故郷」代表作、「春」（農民生活をかいたもの）、多数の短編、解放後「よみかへる大地」最近「豆満江」三部作、一部が出た。昨年末刊行。韓雪野—1928年「角力」「過渡期」（農民か工場労働者に变り、郷中意識が荒廃して棄村長編「黄昏」「塔」、解放後では長編「歴史」「大同江」三部作がある。「姉妹」短編、最近「大同江」二部まで出た。黄健（37、8才）解放後「炭鉦村」短編「幸福」中編、以上が代表的なもの。

○「朝鮮文学」機関誌に載る。

○尹世平（45才位）評論分科委員会委員長、春香伝研究で有名。などの話。

○昼食。サシミがついてゐる。タマゴヤキ、スイモノ。サシミは折角ながら生ぐさくて、ひと片食べたきり。中華料理のゴテゴテから急にサラサラとしたものになつてしまつた。

○市内見学 2時半出発。三台の自働車。

○中央広場（金日成広場）スターリン通り、政府機関の中心となる。解放闘争博物館、歴史博物館とを建てる計画。大同江に通じる遊歩道を作る。スターリン大通りは45m、昔の大通りとは別のところ、昔の中心地はなかつたが今後はここが中心となる。この周囲には四階五階以上の建物がならぶ。昔は下水道と両水道との区別かなかつたが、今後はある。暖房装置をつける。労働者アパート8ヶ月でできた。五階建て。今建つてゐるのは第一綜合庁舎と、第二。第三は自分たちのホテルの前に工事中。車でスターリン大通りを行く。

○大同門。全市廢墟となつたものの再建、全市仕事場働いてゐる人たち、市民たち兵隊たち。六百年前<sup>7)</sup>に修理したといふだけでいつ建つたかわからない大同門。

○大同江。ひろびろとした清い流れ。白い砂洲。爆破やられたのを去年6月修復した。対岸の野壕もやられた。工場地帯であるため。左手に酒岩山。

○練光亭。古いたてもの、川に面す。

1111年建てらた後しばしば建てなほされた。1573年が現在の形、戦時はここで指揮、平素は

7) 実際には、大同門は高麗時代の六世紀につくられ、一七世紀に改修された。だから、正確には300年前あるは1600年代とすべきだが、火野が聞き間違えたのだろう。

民の遊興地。この建物をこわす者は罰する。○物質文化遺物係「保」存委員会、高札。

○牡丹峯。爆撃で全部焼<sup>ママ</sup>けのこり、アカシアの木一本のこつた。あと植樹<sup>ママ</sup>した。解放塔。アメリカが来たときぶつこわし、射撃演習の目標に作つた。後部にある革命戦士の墓をアメリカ兵がほりかへした。

○乙蜜台。古い建物。砲陣地。周囲に銃眼。展望絶佳。グランド。

○古墳二つ。2100年伝承の木のもの。レンガ作りのもの。大同江岸の近くに300ほどあったもののうち、完全に近いものを運んで来たといふ。

○国立中央歴史博物館。館長黄漢氏。

○石器時代の遺物多く発掘されてゐる。特に咸興北辺、巨満江附近に豊富。旧石器時代のものは見当たらない。二千三百年前位のものの発見。-○骨類、石器時代末期。○土器類○金属文化の初期。青銅、鏡、刀、槍、平安北道に多い。2年「千」2、3百年前。

○漢時代、匱「櫛笥・鏡箱」、銅鏡、中国からきたもの。銅壺、漢鏡、石かざり、武器類、

○墓から出た木馬、○瓦磚、○楽浪時代の木棺、骨が半壊の底に骨かこびりついてゐる。○彩筐。アメリカが壊したのを修理した。○盤、耳杯、母子盆、漆匙、

○高麗時代、古墳から出た壁画の模写、1948-49年、安岳の古墳、規模大なるもの、前室 後室、玄関、左大室ははつきりしないが、「冬寿」といふ人らしい、「永和十三年十月」といふ字。原物としては池上にあるのだが、すこしくぼんだところにあつた。城石大同門のところ、文字刻んである。「丙戌十二年漢城下後群悦文達節自此西北行

↑官の名

渉←不明?」之」

○長安城とコクリ「高句麗」時代はいつた。

○高麗時代の遺物、ヤキモノ類○李朝○絵画-「申」思任堂、竹、茄子図、金明国(400年前、日本に使節で渡つた)神仙図、○「鄭」謙齊-有名な風景画家。その弟子、玄齊、もつとも有名

な画家。1707-1769、○競齊-風俗図(号に齊が多い)○金弘道、朝鮮全時代を通じてもつとも知られた画家、代表作はない[北朝鮮には金弘道の代表作といえるものはない]。風俗図、18世紀、京城博物館<sup>8)</sup>に代表作があつたが今はわからぬ、行北島、自画像、○近代画家、

○「李」栗谷先生筆蹟、○安仲「中」植(1861-1919)

○女家「女性画家か」入道会前日、絵をかいて、その上に牛の爪をうすくはいで貼つたもの。

○キセル、○着物、筆、類美しい。7ツ傘、笠、類。

○地下劇場の入口をくだる。岩をくりぬいた深い穴、ひいやりとする空気、セメントの階段、暗い電灯、しかし地底に達すると、そこに立派な劇場がある。よくもこんなものを作つたと感動した。若い劇場人、地下劇場について、記録帳を持つて話す-

○1951年4月着工、8月15日記念日に開催、7万24名の労、2万5千軒米の石岩をほりだした。長さ31m、横12m、定員800、左、4m幅の休憩「所」、右に3mの廊下、には着室「着がえ部屋か」、楽屋、壺底便所などがある。坑道六ツ、(傾斜二ツ、平坦坑道四ツ)重要なことは劇場でみんなやつたので、アメ公バクゲキした、一トン半位のバクダンを落としたが、ビクともしなかつた。深さ92m、階段192段、設計者姜処漢(弱冠32才)地上別場も同じ設計、去年5月1日に間に合ふやうできた。中央朝鮮設計研究所主任。有能な青年といふ。逢つてみたくなつた。

欄外上部(カンゲイ大会とオペラ)

○また192段の階段をのぼる。ふうふういふ。車に乗り、西平壤の方へ行く。ひどい爆撃のあとと復興事業のこつてゐる残骸に弾痕点点穴だらけ。平壤全体が土木建築工事現場である。学校だけが早く建てられたらしい。労働党本部、人民委員会、等の建物。走つてゐるソ連製バス、建設機械もすべてさうだ。十億ルーブリの援助があるとい

8) 朝鮮総督府博物館を指すと思われる。韓国国立中央博物館に引き継がれ、申思任堂や鄭謙齊、金弘道、そしてのちに登場する安中植の絵画は現在も残されている。

ふ。ホテルニ五時半かへる。

○6時半食事。日本料理。やつぱりミソ汁がおいしい。

○牡丹峯劇場にて、歓迎市民大会（午後八時）壇上に席か作つてある。どうもかういふ晴れがましいことは苦手だ。しかし、かういふスタンドプレーが好きな人も多いのである。無理に前列に押し出されいよいよこたれる。

（6月9日に中国から送った電報のレシートなど、いくつかの中国のチラシなどが添付）

（「가극 콩쥐 팅쥐 5막」のパンフレット〔歌劇コンチュイパッチュイ。シンデレラストーリーで、朝鮮の伝統的なお話。歓迎市民大会で行われた催しか〕<sup>9)</sup>）

欄外上部（総合企業体→コンビナート）

（平壤）5月19日

○日程打合会議。（病人二人できた。安部女子と泊屋〔谷〕君）帰る日は二十六日とし、北京に一泊後、上海に廻りたい人と、一直線に香港にかへりたい人とある。しかし、話しあつたやうに、瀋陽で別れた組と香港で合体することはちよつと困難。板門店行と農村行と半分に分れる。

○朝からきこえる作業の音。ハツパ。働く兵隊たち。

○車で出発（10時）大同江をわたる。りつぱな鉄橋大同橋、1000 m 以上か。清い流れ。

○平壤紡績綜合向上。大勢、整列、拍手で出迎へ。

○沈秀浩さん（支配人）の話。背広、36才。

○8・15以前には北には紡績工場ほとんどなかった。砂里院〔沙里院〕に5000余、新義州に8000余の工場があつただけ。南鮮にも見るべきものなかった。1945年、ソ連の武力によつて解放された後計画された。1949年、芸術同画社〔?〕は公債を発行して60000余の工場を建てる計画1949年11月から機械入荷、1950年6月以後、アメリカのため中断された。戦争と同時に、技術

者、工員は兵隊として戦場に出た。一部はこのつて操業。労働者はトンネルを掘り、バリケードを築いて闘争をした。1950年10月、戦域的一時終息、キカイを掘没したり、隠したり、□□した。12月、再進軍かはじまつた。ふたたび工場にかへつた。七仏里にトンネルを掘り、6000余のキカイを入れて工場の事業をつづけた。爆撃は苛烈。1953年1月2日、大爆撃のため、大損害をかうむり、63名工具焼死。この爆撃後、敵愾心高揚、生産増強進め、今まで1種一時間当り25グラムだつたのを28グラムに高めた。

1953年7月、停戦後、12月、六つの工場を集めて一つの綜合企業体として発足した。ソ連は十億ルーブリの援助をあたへることになり、工場には100000留〔ルーブルの意〕をわりあてられて、近代的装置ができた。ソ同盟はそれのみならず技術者たちを派遣して、キカイの組立などをやつてくれた。1954年10月から組立がはじめられ、同作業開始後、五六ヶ月にすぎない。歴史が短く、技手技師は新教育をうけた若い人たち、工員も新しい。生産増強、1945年に比べて、綿糸は約3倍、綿織物6倍、約6千万メートル（?）、クツ下2.5倍生産される予定。現在、うごいてゐる設備は完成されるときに半分のもの、紡績だけ。全体としての規模、綿、染色、工場が建設される予定。規模はずつと大きい。各種特殊織物とともに美術染色もできる予定。今年815以前に完成。労働者数、「朝鮮の過去になかつた多数の労働者がここで働いてゐる」待遇、最低1300-1500円、最高4000-5000円（月給）、これ以外に、食糧、被服等は安い値段で支給する。保護施設—結核予防課、婦人科を持つ病院（女工か各々）托児〔託児〕所、特殊經理室、栄養補給所、職場休養所、等がある。通ひもあれば合宿所もある。家庭アパート、独身合宿、等。合宿食費300円

○工場見学

欄外上部（金振礼さんも文盲であつた）労働英雄金鳳礼

9) この「가극 콩쥐 팅쥐」のパンフレットには、演出家や役者の名前、筋書きなどがきちんと書かれているが、すべて朝鮮語であるため、通訳に読んでもらったのだろう。



●座談会。男女工員 20 数名、子供のやうに若い女工。この中に労働英雄があり、一級二級三級等の勲章もらつたものばかり。前の部屋にテエブルが長くなればられ、ビール、サイダー、菓子、リング等。

○金振礼さんの話（職業同盟委員長）生活状況、一日に米最高 900 グラム - 700 グラム、15 キロ 70 円、衣服一年二着、国家から安い値で支給。労働作業衣は無償配給、家族に対しては食糧衣服を国家から配給、制度三級ある。能力によつて一級二級三級をきめる。ミソ、キロ 10 円、一切の別食物安く配給。休養所にあるときには自費ではなく、社会保険。托児〔託児〕所、幼稚園、夜間学校、専門学校の勉強は一切国家の費用、工場は独立操業税で利益は税金として労働者へ。本棒の 100 乃至 300% かあたへられる。女性労働者に対して産前 35 日産後 42 日間の有給休暇がある。必要品の配給国家からうける。お産のときも産院無料。病気のときは無料治療、結核もなほるまで家族も補償する。同旗勲章三級以上は汽車バス電車一切無賃。年金（勲章）があるが、これを献上して復興資金にした。最高賃金 4000 円以上の人はあまるので、公年金、文化向上に使ふ。解放前は 20% しか文字がよめなかつたか、今は全部中学校卒以上の労力〔能力〕を持つてゐる。独学で勉強、技師技手の免状もらつた者 250 名ある。

○鈴木さん、泊谷君（ねこんでゐる）からこづかつた日鋼争議の写真をみんなに見せる。好きなのがあれば一枚づつあげるといふと、ニッコリする。

○労働英雄、高永淑さん（27 才女工 ガッチリした大柄な女）- 解放前から紡績工場で働いた。前は勉強できなかつたし、技術も劣つてゐた。偉大なるソビエト軍隊の力によつて解放された後、それかできるやうになつた。前の 1、2 台が今は 12 台の能力。1950 年から 52 年において、年生産計画 88703 m であつたか、実際は 102763 m 織つた。これによつて英雄勲章をうけることができた。見習工養成、経費を節約するために、1 年 104700 m の原料を節約する運動に率先した。

賃銀〔賃金〕、解放後、男女、同じ仕事をして、男が 50 円もらへば、女は 10 円か 20 円しか、日本帝国主義者がくれなかつた。解放後は男と同等。

欄外上部（すぐに出る日本帝国主義者といふ言葉）

○男工、在日朝鮮人のこときく。畑中さん答へる。（日朝協会理事）在日朝鮮人は日本ではいろいろな圧力をうけてゐる。民族教育もうけられないのである。しかし、東京都の問題<sup>10)</sup>があつて後、若干それができるやうになつた。北鮮にかへつて勉強したいといふ者も多いが、国交が恢復しないため、それも困難。総数約 60 万、けつして生活が充分といふわけではないが、日本人もしだいに理解して来てゐるから、今後は善処して行けると思ふ。われわれもさらに努力する、といふやうな話。

○子供のやうな女工員たちが、リングとアメ玉とビスケツトをみんな食べてしまつた。

（平壤）5 月 20 日

○女中来て、安部さん腹かいたいといつてゐるといふ。行つてみるとカゼの方はよくなつたのに下腹がいたい、前に盲腸をやつたことがあるから、盲腸かも知れない、腹膜かも知れないとのこと。盲腸なら、ここで切開したくない、モスクワで手術したいなどといふ。医者でもらふことにする。朝鮮に来て次々に病人が出て、朝鮮側の人に心配をかけてゐる。苦笑。疲れなのかも知れない。自分も少し疲れた。

○地図をひらいてみると、平壤から若松〔北九州市〕までは直結距離で、静岡まで位。それなのに北京、広東、香港を廻つて帰らねばならぬ。一番近い国が一番遠い国になつてしまつた。

○作家座談会（牡丹峯劇場の一室 11 時）

安部、泊谷、朝田の三氏をのぞいて出席。先方は各方面の人がたくさん集まつてゐて恐縮、自分に司会をやれとのこと。関〔韓〕雪野さんは病気と

10) 1949 年 10 月に、朝鮮人学校閉鎖令が出され、翌 11 月から東京都立朝鮮学校が設置されたこと。1955 年 4 月に学校法人東京朝鮮学園に移管される。

かで欠席。卓上にはビール、サイダー、人参酒、まづ一般的な話からきくことにして、宋影さんが用意して来た原稿で話してくれる。自分としては自分の名を知つてゐるこの国の作家たちがどう考へてゐるかを考へると、内心忸怩たるものがある。異様な立場におかれたものだ。

○洪淳哲さん（詩人評論家 作家同盟中央委員長）

宋影	（戯曲作家）
尹斗憲	（ ）
鄭志樹	（舞踊家）
劉宗変	（国立古典劇場総長）
文献玉	（作曲家）女、メガネ、朝鮮服
李北鳴	（小説家）
金益聲	（芸術家同盟書記長）
安基玉	（古典作曲家 功勲俳優）
李熙林	（音楽評論家）
李曙郷	（文化室伝省[?]文化芸術局副局長）
李載徳	（国立劇場副総長）

欄外上部（1925年朝鮮プロレタリア芸術同盟の時、韓雪野さんといつしよだつた宋影）

○宋影さんの話—文学部門。人民を教育し、人民を武装させる典型的な人物をつくりだし、前途に希望を持たせるやうな文学を創造すること。思想[よ]りも深く、革命的なもの、否定的な面を除去すること。(1) 平和的建設時期—全体的に愛国主義、祖国と人民に対する忠誠心、労働者の鉄のごとき規律、闘争歴史、金日成元帥を中心とするテーマ。韓雪野「血路」「凱旋」趙基天「白頭山」（長編叙事詩）韓鳴泉の「北間島」、朴幹保戯曲「太陽を待つ人々たち」金承久「わが故郷」（シナリオ）が代表作。総合詩集「われらの太陽」「首領は呼びかける」伝説的英雄の事実が歌はれたのではなく、敬愛する心情が表現されてゐる。「生の歌」趙基天、董昇台「夜明けの歌」韓雪野「炭坑村」李北鳴「労働一家」黄健「炭脈」朴雄傑「硫酸」李荒敏「分水嶺」千世鳳「かみなり親父」戯曲、宋影「ならんでゐる二つの家」南宮満「林産鉄道」朴泰泳「坑道」等の主人公は新しい建設の労働英雄。李箕永「土」白文煥「成長」朴英鎬

「飛龍里の農民達」等の戯曲作品では土地改革にあら[わ]れた農民の生活の姿が措約[縮約か]されてゐる。ソビエト文学小説集「偉大なる功勲」、「永遠なる親善」詩集「栄光のスターリンに」長編詩「われらか道」をはじめ李春真の小説「アンナ」尹時哲の小説「地質技士」等は朝鮮[ソ連]親善のテーマ。解放後の文学の重要な部分はアメリカ帝国主義占領下における朝鮮の斗争の姿。閔丙均の詩「怒りの書」、趙基天「抗争の麗水」、白仁俊「智異山地区」などの詩、康承翰「漢拏山」（詩）、南宮満の「荷衣島」（戯曲）、宋影の戯曲「錦山郡守」、朴泰民の小説「第二戦区」朝鮮にゐる同胞の斗ひの姿。

(2) 戦争期の文学—敵と苛烈な斗争をつづけた。作家が人民軍に従軍した。志気、勇敢性、愛国心描写、作家自身が銃剣をもつて火線に出た。戦死した作家、戦傷作家もある。戦死者中には趙基天。日本帝国主義に争対したバルチザン斗争、韓雪野「歴史」、黄健「幸福」尹世重「旧隊員と新隊員」、朴雄傑の「上級電話手」（以上小説）閔丙均「朝鮮の歌」（長編叙事詩）、金朝奎の「この人たちの中で」（短詩）金北原「雲爐峯」、戯曲で尹斗憲「小隊進め」（二幕）趙灵出の「戦友」、洪健「1211高地」（五幕）、韓星「海が見える」（五幕）、アメリカ帝国主義者の蛮行バクロ、カンセツヤ[韓雪野]「狼」、戦事銃後をあつかつた小説、黄健「妻」、李宗敏「軌道の上で」、劉槿淳の「灰燼の中で」辺熙根の「初雪」、詩では趙基天の「朝鮮は戦ふ」、閔丙均の「オロリの原」詩集、金舜石「英雄の土」、韓鳳植の戯曲「炭坑の人々」（四幕）尹斗憲のシナリオ「少年バルチザン」「郷土を守る人々」（国旗勲章第一級）、児童小説で李園友の「待つてゐた日」、朝中親善をテーマにしたもの、洪淳哲の詩集「栄光をかれらに」、これらの外、人民軍戦士がうたつたもの朱台舜、朴槿、李豪一、甲相浩、金永哲、金敬一、韓野台、等。

(3) 戦後、復旧建設の時期—前進する現実と歩調を合はせる文学作品、生活の研究、勤労人民の真の姿を把握問題。作家は戦線から工場漁村農村に動員された。1955年第一四半期まで、小説、詩、戯曲、児童文学をふくめ、2238篇、新人たち作

品 393、多様性と現実性とによつて特徴づけられる。重要なテーマは模範となる労働階級の斗争。新しい人間タイプ、国際親善と団結。小説、兪桓林「職業同盟の班長」、辺熙根「かがやかしき展望」、詩では閔丙均の「東海詩抄」、鄭文仰の「樵夫の呼びかけ」、戯曲では柳基洪野「なつかしい所で」(四幕)、呉雲仙「新しい炭脈をたづねて」(四幕)朴哲山の(人民軍兵士)「戦闘命令」(一幕)新解放地区農民(と南のみじめな農民を対象して)をかいた崔健、李宗淳の「ふたたびそんなには生きられない」(五幕)、過去のアメリカ侵略をかいた宋影の「江華島」(五幕)朝鮮人民軍創立記念文学賞受賞した。祖国解放時期の中編小説金永錫「若い勇士達」李宗烈の短編小説「命令」、金永植の短編「血脈」、詩では洪淳哲の(長編叙事詩)「母」、金学然の長編叙事詩「少年バルチザンの除[徐]康濂」、朱台舜の長編叙事詩「銃械[器]射手」、戯曲で、韓星「われらを待て」(四幕)、[宋]影の代表作、韓雪野の「大同江」三部作完成、李箕永「豆満江」三部の中一部だけ出版。児童文学では朴応浩の「四十五分」、宋昌一の「風車」、童話で、姜孝準の「狸の新しい家」、金遂斌の「もつとも大きな力」、劉連玉の「模型図を作りながら」等がある。

○洪淳哲さんー評論活動について。解放後、過去の朝鮮社会主義リアリズム理論をうけつぐ為、ソビエト文学論考を発展させた安含光、金明洙、韓暁、尹世平、厳浩錫、尹平憲等の人たち。新人育成につとめてゐる。(後に本をさしあげたい)

○発表形式ー作家同盟の中の分科、小説、詩、戯曲、評論、児童文学、外国文学の分科委員会で作品を合評、討論、作家への助言、新聞雑誌で発表。検閲でなく助力。多くの作家たちは農村、漁村、工場に入つて一緒に生活しながら、創作してゐる。生活については国家から特別な優遇原稿料、文化労力費として払はれてるが、今、文化室伝省[?]で修正中。二百字詰一枚いくら。具体的な例(宋影さん)解放前は原稿料の代りに監獄、[解放]後は生活の心配ない

宋影の戯曲、一幕がかかれるとき原作料、上演のたびに上演料、一幕に十万円、三千円あれば五人家族が今生活できる。住宅は優先的に五六間の住

宅無償。基本的後□[?]の外に、作家同盟からも基金があつて助成。読まれる部数、3万-5万、印税二割位、版を重ねるごとに支払はれる。

○古典文学、民族文学と新文学との問題。ーすぐれた伝統を尊重し、出版も多い。生活の中に生きてゐる。埋れた古典の発掘、読書熱高い。「春香伝」「沈清伝」、朴燕巖、百五十年紀念、人民的生活を指導、ヤンバン[両班 支配階層]を諷刺した。「両班伝」「虎叱」「許生伝」等の作品。15年島流しされた。大学の研究では漢字のまま読むが、人民に見せるときにはオンモン[諺文 ハングル]になはす。日本文学は解放後、紹介されてゐない。ソビエトで岩上[順一]、徳永[直]両氏と逢ひ、交流について語つた。作家は教科書の□□に動いてゐる。新劇をやる劇場、道立劇場、市立劇場、児童劇場、エストラダ(□元劇場)おのおの劇団で研究、平壤も綜合芸術学校、過去劇団は劇場も事務所もなかつた。今は劇場と附属施設をもつてゐる。俳優月給、一級から五級、出演料は別、食糧、住宅、衣服、級による。功勲俳優は高い。入場料はとるが、国立のため、独立採算制。

○賞ー最高常任委員会から勲章をおくる。各部門の該当機関で一度選考して、委員会に推す。人民軍創建五週年紀念の各部門芸術賞。文化室伝省[?]、随時、各部局にわたつて表彰する。

○音楽ー伝統は古い、西洋音楽は入つてゐるが、民族的なものが基本になつてゐる。プロレタリア運動とともに新しい音楽が生まれて来てゐる。

○発声法(劉宗姜さん) 写法[?]を科学的に究明されてゐる。民族楽器65種ある。西洋的なものを民族楽器によるインフォールもある。

○李曙郷さんー民族的インタネーションが作曲家の中で重要な課題となつてゐる。西洋様式による発展の研究。形式は民族的、内容は社会主義的、各作曲家毎週一回、理論研究会をひらき、発表会を催して、討議する。芸術全般において古典継承に大きな配慮をれて[して]ゐる。古典芸術劇場設立。古典劇は1951年、戦争中独立した。古典をテーマにしたオペラか次々にあらはれてゐる。現代楽譜で採録する。民謡蒐集、採録、録音。民族音楽でハーモニーの研究もされ、春香伝で立証された。古典楽器の存置発展、新しい楽器を発

見、過去の植民地時代、自然に発展できなかった。方向は外から外国形式をおつかぶせるのではなく、原型によせられた先記の、音に対する理想を楽器に発見する。古典音楽か新しい時代に発展の可能性かみつめられた。今年、来年には民族的大規模のオーケストラを作る計画。舞踊も同様。西洋おどりは足、朝鮮は上体にも特徴がある。バレエが新しく生まれつつある。「愛国者」「半夜月城曲」(崔承崑[喜]関係)等がその試みの実践。バレエと朝鮮民族舞踊と合致させる。内面的に統一する。西洋流の跳躍、表情と組みあはせる。「新生伝」地方、鳳山の仮面舞、特権階級のもの、民衆のもの、とある。農楽等を研究。映画等によつて動きを分析して研究。基本動作が何々流になつてゐるのを科学的に整理し、体系づける。図解、解説する準備終つた。討論によつて後点をとつて、完成させる。

○2時半までかつたので、切りあげる。先方は日本のことをききたい様子であつたが、散会した。劇場正面に出て記念撮影。名と人が合はぬし、あとでわからなくなると困るので、前頁に書いた名のとほりならんでもらふ。小学校の生徒のやうに名をよび、ならばせるのでみんな笑ふ。一人が、火野さんはやつぱり九州にゐるんですかときいたが、誰だつたのかわからなかつた。金史良の名と文学賞の話が出たとき、芥川賞の時計を見せたが、李曙郷さんが、糞尿譚ですねといつた。自分の名を知つてゐるこの国の人たちが自分をどう考えてゐるか、やはり気の重くなる話である。

欄外上部(委員長、李東英(病氣))

○5時すこし前、ホテルを出発。牡丹峯を越えて向ふ側に降りる。土葬した饅頭墓のあるさびしい村落。井戸水を汲んでゐる若い娘。茅屋点々。

○赤十字中央委員会中央委員 金培準

〃 趙英哲

〃 書記長 李昌植

〃 副委員長 柳基春

○戦時中に、機銃掃射時をふせぐために、ケンゴ

に作つた、カマボコ型舎屋。れんか作りの狭く長い家。李徳全女史が応援のためにやつて来たことがある。

○畑中さんから、在鮮日本人の話をきりだす。中国からは約2万名かへることに援助をうけ、ソ同盟からも一部かへつて来た。ヴェトナムからも中国経由で、すこしだがかへつた。朝鮮については、日本赤十字社から、国際ジュネーヴ条約を通じて紹介したが、よく情報を得てゐない。インドのニューデリーでも非公式に話をしたが、率直に話をうけたまはりたい。

○柳基春さんの答。—第二次戦争の時期に多くの兵士日本人が帰国し行つたことはもつとも考える。家族親戚が心配してゐることもよくわかる。1948年11月、ソビエト軍隊が撤退したが、それまで民主的事業がおこなはれた。日本人は南へ行つた。1946年、1947年、1948年までに4000名□日本人を送還したことがある。現在、不十分な続行ではあるが、約210余名が北鮮にゐる。その大部分は解放前から結婚し、世帯主が朝鮮人といふ条件で、子女を持つてゐる。これらの子供たちは国の教育をうけてゐる。日本赤十字社から数次、問ひ合はせをうけたことがある。最近ジュネーヴの国際赤十字社連盟から問ひはせがあつたので、それに返事すると同時に、この前に紹介あつたことを確認し、ニューデリーで一部代表とこのことを話しあつたといふ事実を日本赤十字社に伝へた。団長に対する回答以上の通り。

○畑中さん—念を押す。

○柳基春さん—朝鮮赤十字社としては問ひ合はせがあつたため返事したので、日朝協会と日本赤十字社とがいつしよになつて解決することが適當のやうに思ふ。

○畑中さん—よくわかつた。しからば、どんな方法でやつたらよいか、誰か代表か来るか、電報、手紙等でやるか?

○副委員長—個人の考へとしては、日赤と日協[日朝協会]とがどういふ方法で解決するか予測できないが、朝赤[朝鮮赤十字社]としては、南日声明<sup>11)</sup>による基本条件が解決されねばならない

11) 南日(1913-1976年)は朝鮮戦争停戦協定の北朝鮮代表となった人物で、軍人であり政治家でもあつた。南日声明とは1955年2月に日朝国交回復を求めた声明だ。

と考へるが、団長の意見はいかが？

○畑中さん－中国では紅十字会が日赤、日中友好協会、アジア太平洋協会（？）の三団体から七名の代表団を結成、一昨年一月、北京を訪問した。その一人に自分が加はり、船その他のことをきめた。ソ同盟の場合もモスクウを訪問して実行した例がある。

○柳基春さん－個人的な意見であるが、代表が来て、活動するのが適當ではないかと自分は考へる。

○畑中さん－具体的な話あひをすすめたい。

○柳基春さん－自分ももつともと思ふ。朝赤としては人道的立場から、平和を冀んでゐますので、金日成元帥の指導の下に、具体化することを努力する。

○畑中さん－210 余名のうち、どれぐらゐの者が帰国を希望してゐるか、差支へなければ承りたい。

○柳基春さん－精確な資料かないのが、調査したところによると、20 名か 25 名位かと思ふ。過半数は朝鮮の男と結婚してゐるので、それは別と思ふ。

○畑中さん－その 20 数名の者はどういふ者か。

○柳基春さん－充分な調査が、政府は外国人として特別な待遇をしてゐる。労働者、事務員は約 600 グラムで、雑穀と白米をまぜて供給してゐるか、日本人には 900 グラム、80% 白米供給、8 年勤続しないと配給規定の三級がもらへないが、日本人には期限関係なく答へてゐる。帰国しはぐれた人たちと思ふが、生活はさう悪い方ではない。労働力を喪失するとか、老人の均分は 1000 円乃至 1500 円の給料をあたへてゐるし、600 グラムの配給をしてゐる。－すこし休みながらやりませう。あまりあまり緊張すると熱か出ます（笑）

○畑中さん－これまで中国の側では、かへる気のないやうに見えた者が、帰国の手づきが終ると、急にかへりたくなつたので、[帰国希望者が]増えるのではないか。

○柳基春さん－さういふこともあり得る。

○畑中さん－日本人戦犯はゐるかゐらないか。

○柳基春さん－自分の知るところではそれはない。こつちから質問したいが、いろいろな消息によると、日本にゐる朝鮮人は、迫害されてゐるといふことだが、様子をききたい。学生たちの教育問題だが、朝鮮学校をへいさしたり、朝鮮語を使へないやうにしたといふことだが、ほんとうかどうか？

欄外上部 大村に収容されてゐる鮮人<sup>12)</sup>は、本国強制送還といふ判決をうけてゐる

○畑中さん－アメリカの政策にもとづく圧迫が強くなつた。東京の問題[朝鮮学校の閉鎖と都立学校化]は波紋が大きくなつた。民族教育を妨害されてゐるのは事実。九州の大村収容所に 1000 名近くの鮮人が収容されてゐる。一部は南鮮から密入国を企てた者、一部は日本民族的運動をしたため投獄された者。この帰国問題について研究したこともある。北朝鮮にかへつて勉強したい学生も多い。こちらの在鮮日本人の帰国問題とからんで解決できるのではないかと思ふ。いしい（交換条件みたいなのはどうか？）

○鈴木朝英さん－日本の学校の三つ、官立、私立、各種学校（裁縫、料理、等）解放後、朝鮮人間にも民族教育したいといふ自然な欲求が起り、三種の外に、認可なしで、各所に朝鮮人学校が建てられた。このままでは法律でしぼられるので、これに援助する運動がおこつた。しかし、政府の弾圧はひどくなつた。当局は経営の基礎、教員の資格などをタテに閉鎖を命じた。東京ではこのため大きな闘争が起つた。インドへ出かける前、両方で妥協できた。各種学校の形式によれば許可されるといふことになつた。しかし、法律にもとづく規模は中都市以下で、鮮人の少いところではむづかしい。普通の学校に通はせ、ひけてから塾の形式で民族教育を行ふ方法をとつてゐる。日教組もこれを応援してゐる。「朝鮮人教育」といふ機関誌を出して斗争中。根本的には南日声明に解決の鍵がある。

○牧之内さん－収容されてゐる朝鮮人は、北へな

12) 大村収容所とは、朝鮮戦争で日本に密航した者などを収容し強制送還するためにつくられた組織。長崎県大村市にあった。

ら帰るか南にはかへらないといつてゐる。(会心さうにうなづく幹部たち)

○柳基春さん—もう一つ伺ひたいことがある。在日朝鮮人たちが、財産や経済について保護をうけてゐないといふがどうか。一国の国民としての権利をみとめられてゐないといふがどうか。国籍を出させない。

○畑中さん—南鮮に籍がないと、外国人としてみとめないと政府は称してゐる。大部分は李承晩のパスポートをとることを欲しないので、外国人として登録をうける法的基礎を持たない。李洪全さんもインド行のパスポートがとれなかつた。生活の面では、差別待遇はされないが、朝鮮人であるため仕事かできないといふことはある。このため生活に窮乏してゐる者が多い。

○牧之内さん—国交回復されないためといふ一語に尽きる。

○吉岡さん—岡山附近、生業につけない、金融に困る。信用組合を作らうとしても、役所では認可しない方針、アメリカの方針を衣にもつたやりかた。北鮮にゐる家族のことを心配して、通信したい。

○柳基春さん—赤十字社に届ければ、伝へる。

○松岡さん—木村さんからのことづけ、戸畑〔北九州市〕にゐる朝鮮人で、こちらに母のゐる者の消息。

○柳基春さん—ひとつお願ひしたいこと。各界各層の皆さんが、朝鮮人との友好、助けあひを願ひたい。

○7時半辞去。牡丹峯に車がのぼると龍岳に沈む太陽。チヨゴリとチマを着た若い女たちが廢墟の中できわだつて清潔な感じ。スターリン大通りについてゐる鈴蘭灯の列。

○おみやげに本を十冊ほど貰つたが、全部朝鮮字なのでさっぱりわからない。戯曲、詩集、小説など。

○ホテルにかへると、朝日さん、まだ熱があつて汗かいてゐる。安部女史は元気さうで、引揚げ問題を国会で問題にして政府をつるしあげてやらんにヤア、などといふ。盲腸らしいが切らなくても

すむらしい。

○鈴木〔鈴木〕さん、みんなを集め、板門店行は21日土曜の夜九時に出て、日曜の朝5時につくプランだつたが、自動車で行けば二時間で、日がへりできるといふ。8時間の距離を2時間で行けるとは少しおかしいが、りつばな軍事道路でも国境までできてゐるのか。

○夕飯後、一階の部屋で映画「崔玉姫」を見る。わざわざ映写材を運んで来て、われわれだけに見せてくれる。戦争中の女バルチザンの英雄譚。わかりきつたテーマと筋だが、中国の二つの映画よりは迫力があつた。主演は文芸峯、有名な人気女優らしい。理知的な風貌と演技。ニュースは原水爆反対署名運動、安州の東洋一といふ灌漑工事。平壤に国立撮影所が一つあるとのこと。

## 2 5 日間の翻刻を終えて。

この日記のうち、女子工場労働者（労働英雄）たちとの会談は、のちに「北鮮女性点描」でいかされている。また、かなり早期に崔承喜に会いたがつている—文化交流として—こともわかる。文学関係の交流会は、当時の北朝鮮でどのような作家が活躍していたのかを知るいい資料だといえよう。気になるのは、李泰俊、朴泰遠、洪命喜などのベテラン作家の名前がいっさい出ていないということ、北朝鮮に拉致された李光洙の名前も登場しないことだ。朴泰遠と洪命喜はその後北朝鮮で活躍しているのだが、この事実が何を意味するのかはまだわからない。それに対して、朝鮮戦争ですでに死んでいる金史良については、彼が芥川賞候補にあがつたという経緯から、火野ら日本側から質問されている。そして、火野自身は、自分が旧日本陸軍と結びついていたことから、ばつの悪さを日記で伝えているのが目立つ。21日には金日成総合大学などを訪問し、22日には板門店に行くのだが—この体験が「板門店」という短編にまとめられている—それは次の稿に譲らう。

## Ashihei HINO in North Korea (1):

Reprinting Ashihei HINO's *Diary in North Korea* and his stories,  
“Panmunjum” and “Personal Reports of Women in North Korea”

Kenji LEE

### ABSTRACT

Ashihei HINO visited North Korea in May 1955. I wonder what he saw and felt then. Thus, I want to reprint his diary, *Hokusen Tabinikki*. In Imperial Japanese, *hokusen* means “North Korea,” and I want to report that his experience appeared in his stories, “Panmunjum” and “Personal Reports of Women in North Korea.” However, his diary is massive, and HINO's handwritten letters are difficult to read. Therefore, I will in this paper reprint only five days, from May 16 to 20, 1955, titled “Ashihei HINO in North Korea (1).” I will reprint May 21-23, 1955, as “Ashihei HINO in North Korea (2)” in the next journal and May 24-27, 1955, as “Ashihei HINO in North Korea (3)” afterwards.

**Key Words:** Ashihei HINO, North Korea, diary, The cultural situation on North Korea in 1955